

因習の贅婿

R18

2026・8・27

目次

第1話 贅婿の儀式

第2話 印の疼き

第1話 贅婿の儀式

炭焼き小屋の奥で、朔は木を割っていた。

斧の感触は手に馴染んでいる。煙の匂いも、いつものものだ。朝から続けている。手のひらにマメができかけている。木の繊維が指に食い込む。

村の男たちが小屋の前に立った。三人。誰も表情を変えていない。仕事の続きを告げる顔だ。説明はない。

「朔。今日の贅婿はお前だ」

声は平坦だった。説明はなかった。儀式の日が来た、というだけだ。

朔は斧を置いた。木片を払い落とした。手を拭った。

(……分かってる)

村の周期儀式。何十年かに一度、狼神に贅婿を捧げる。選ばれた者は、神の種を受ける。逃げた者はいない。逃げたら村が終わる、と年寄りたちは言う。記録はない。言い伝えだけだ。村の外には出ない。出た者は戻ってこない。

朔は炭焼きの手伝いだ。親はいない。村に残っているだけの男だ。選ばれる理由は、それだけだった。特別な血ではない。ただ、残っていた。仕事ができる体があった。

「分かった」

短く答えた。声は掠れなかった。震えてもいない。

男たちは頷いた。

「禊をして、社へ行け。今夜のうちに。白い布を持たせる」

それだけ言って、去っていった。足音が遠ざかる。

朔は一人で斧を片付けた。小屋の火を消した。いつもの作業だ。特別なことは何もない。火の粉を踏み消した。

山道を歩き始めた。夜の気配が近い。

———

山の社は、注連縄の向こうにあった。

朔は裸足で川に入った。水は冷たかった。膝まで浸かる。体を清める。それだけだ。儀式の前の禊だ。年寄りの言いつけ通りだ。

水を両手ですくって、顔にかけた。首筋にかけた。胸にかけた。下半身も。冷たい水が股間

を流れる。ちんぽが縮んだ。ちんぽの下に割れ目がある。水がまんこへ入り、膣まで冷たい。

濡れた体に白い布を巻かれた。村人の手は事務的だった。布は薄くて、透ける。肌がそのまま見える。乳首の形が浮く。股間の膨らみが分かる。

「中へ入れ。神が待っている。声は出さな。村まで届く」

社の奥、暗い空間に入った。扉が閉まった。外の光が消えた。木の扉が重い。

空気が変わった。

熱い。湿っている。人の気配ではない。獣の匂いが濃い。土と、血と、何か甘いものが混じっている。息をするだけで肺に入る。

「来たか」

低い声がした。床に響く。声が体を震わせる。

目が慣れてくると、大きな影があった。

狼の耳が立っている。黒い毛が肩まで流れている。人の形をした体。牙が白い。目が黄色い。体格差がある。朔の倍はある。肩幅が広い。腕が太い。

黒牙。村の神だ。

朔は跪いた。儀式だからだ。頭を下げた。膝が床につく。

「贅婿の朔だ。儀式を受ける」

声は掠れなかった。意地を残した。

黒牙が近づいた。体温が高い。息がかかる。獣の匂いが直接鼻に入る。熱が肌に触れる前から分かる。

「お前は残るつもりか」

「儀式を受ける。残るかどうかは、後で決める」

言い切った。目を上げた。

黒牙の目が細くなった。笑っているのか、分からない。牙が見える。舌が赤い。

「いい度胸だ。村の男はいつも震えていた。お前は違う」

大きな手が朔の肩を押した。力がある。床に伏せられた。胸が板に当たる。息が詰まる。

白い布がはぎ取られた。一気に。肌が露出した。冷たい空気が肌に触れる。すぐに熱い影が覆う。

(……これからだ)

羞恥が来た。恥ずかしい。知っている。それでも体は動かない。儀式だからだ。因習だからだ。村を守るためだ。自分の意地は、後で使う。

黒牙の指が朔の割れ目を開いた。熱い。人の指ではない熱さだ。指が太い。爪が少し尖っている。指の腹が粘膜に触れる。

「穴が締まっている。初めてか」

「……ああ」

「無理に開ける。痛みは覚悟しろ。種を受けるまで終わらない。お前は贅婿だ」

指が一つ入った。痛い。内壁が押し広げられる。粘膜が擦れる。指の関節が引っかかる。

「くっ……」

「声を出せ。村に聞こえる必要はないが、俺には聞かせろ。反応を知りたい」

指が二本になった。ずるりと粘膜を搔く。奥まで入る。膣の奥を押される。指が広がる。まんこが強制的に開く。

朔の前のちんぽが、勝手に硬くなっていた。先から我慢汁が垂れている。床に落ちる。

（なんでだ。痛いはずだ。なんで硬くなる。体がおかしい）

恥ずかしい。体が先に反応している。意志とは別だ。穴が熱くなっている。

「気持ちいいのか。贅婿の体は正直だな。穴が湿ってきている。愛液が出ている」

指が三本になった。痛い。内壁が限界まで広がる。引き抜かれると、穴がひくひくと収縮す

る。

指が引き抜かれた。ぬぷ、と音がした。代わりに、熱いものが当たった。

黒牙のちんぽだ。大きい。雁首が穴を押し広げている。熱い。脈打っているのが分かる。先からカウパー液が垂れている。穴に滑り込む準備だ。

「入れるぞ。全部だ」

一気に押し込まれた。

「あ……っ、がっ……！」

痛い。内壁が裂けそうだ。子宮口まで届く勢いで奥を突かれた。ちんぽの根元まで埋まっている。腹の中が満杯だ。子宮が押される感覚がある。

「深い。いい穴だ。人間の男の穴にしては、よく締まる。俺のちんぽを咥え込んでいる」

黒牙が腰を動かした。ずん、ずんと奥を挟む。毎回、子宮口に当たる。雁首が奥の口を叩く。

朔のちんぽから我慢汁が垂れ続けた。床に落ちる。滴が続く。

(……感じるな。感じるな。これは儀式だ。感じる必要はない。体が勝手に……)

「声を我慢するな。俺のちんぽが、お前の穴を開いている。内壁が俺の形を覚えている」

「や、やめ……っ、そんなに奥は……っ。痛い……」

「儀式だ。種を受けるまで終わらない。お前は贅婿だ。穴で受け取れ」

腰の動きが速くなった。ぬちゅ、ぬちゅと水音が立つ。朔の穴から愛液が溢れている。熱い汁が、黒牙のちんぽを伝って太ももに垂れる。ぱちゅ、と音が混じる。

「んっ……あ、あっ……」

声が出た。自分の声ではない。甘い。高い。息が混じる。

黒牙の牙が朔の首筋に触れた。噛まない。熱だけを残す。舌が長い。肌を舐めた。耳の後ろを舐めた。

「お前の体は、もう俺の種を欲しがっている。内壁が吸いついている。離さない」

「ち、違う……っ。痛いっただけだ……っ。儀式だから……」

「嘘だ。穴が締まって、離さない。先っぽが子宮口を叩くたび、お前の体が跳ねている」

事実だった。朔の穴は、痛いのに黒牙のちんぽを締めつけていた。引き抜かれそうになると、粘膜が引き攣る。奥が熱い。

腰が打ち付けられるたび、腹の奥が熱くなる。子宮口が直接擦られる。ちんぽの形が、内壁に刻まれる。

「はあっ……んっ、あっ……！」

（なにこれ……体が……熱い……奥が……）

黒牙の手が朔のちんぽを握った。上下に扱く。親指で先端を擦る。我慢汁で滑る。

「一緒に出せ。中に種を受けながら、お前も果てろ。それが儀式の終わりだ。種を受けろ」

「そんなの……っ、無理だ……っ。俺は……
残るかどうかは……」

「できる。お前の体はもう分かっている。穴
が俺のちんぽを離さない」

奥を突く角度が変わった。膣の内側を正確に
擦られる。毎回。子宮口と同時に。

「あっ……そこ、だめ……っ。あっ♡」

黒牙のちんぽが脈打った。熱いものが、子宮
口に直接注がれた。

「出るぞ。全部受け止めろ」

精液が、どくどくと奥に流れ込む。量が多
い。腹が熱い。膨らむ感覚がある。種が、奥に
溜まっていく。子宮口が開いて、受け入れる。

朔のちんぽも同時に跳ねた。白いものが床に
飛び散った。何回も跳ねた。腰が勝手に動く。

「んあぁっ♡ 出、る……っ♡ あ……っ」

体が震えた。頭の芯が白く弾けた。足の先まで痺れた。穴が、精液を搾り取る。収縮する。

黒牙はすぐに引き抜かなかった。種が漏れないように、奥で止めていた。腰を密着させたまま、動かない。脈がまだ残っている。

「……受け取ったな。種は入った」

「……ああ」

息が荒い。体が重い。穴の奥が熱い。精液が、まだ流れ込んでいる感覚がある。腹が重い。

黒牙の手が、朔の背を撫でた。指が、汗を拭う。髪を払いのける。

「残るかどうかは、お前が決める。ただし、種はもう入っている。体は俺のものだ。明日か

ら、また来る」

黒牙の体が覆いかぶさった。毛が肌に触れる。熱い。牙が耳を噛んだ。軽く。血は出ない。印だ。

「種は奥に残っている。漏れるな」

「……無理だ。溢れてる」

「体が覚えるまで、何度でも入れる。儀式は一度で終わらない」

朔は息を整えた。体が重い。穴がひくひくと動いている。精液がまだ出る。

（……残るかどうかは、俺が決める。種があっても、意地は消えない）

黒牙がようやく引き抜いた。ぬぼ、と音がした。穴から、熱い精液がとろりと溢れた。太も

もを伝う。床に落ちる。白い布の端まで届く。
種の匂いが、社の湿った空気に混ざる。

「体を休めろ。布を巻け。山を下りろ」

「……分かった」

朔はゆっくりと体を起こした。白い布を拾った。体に巻いた。精液が布を汚す。穴が、まだ開いたままだ。精液が漏れる。歩くたびに、内壁が種を押し出す。

社を出た。外の空気は冷たかった。肌が冷える。注連縄の下をくぐると、川の音だけが残った。

山道を下りながら、腹の奥が熱く脈打っていた。種が、残る。残る芽だ。出る権利は、まだ自分の手にある。

山道を下りきったとき、村の灯りが見えた。

男たちが待っていた。

「終わったか」

「ああ」

「体は動くか」

「動く」

それ以上は聞かなかった。儀式は終わった。
種は入った。

朔は炭焼き小屋に戻った。火を起こした。体を温めた。

腹の奥が、まだ熱い。種が、残っている。神の熱が、残っている。耳の後ろが、噛まれた跡で脈を打つ。

意地は、残した。

——第1話 了

第2話 印の疼き

炭焼き小屋の中で、朔は火を見つめていた。

昨夜の社で受けた種は、まだ腹の奥に残っている。熱い。動くたびに、穴の奥がぬるりと滑る。精液が漏れていないか、確かめたくなる。指を伸ばしかけて、止めた。

（触るな。自分で触るな）

耳の後ろが熱い。黒牙の牙が噛んだ場所だ。印だ。脈打つ。朝から続いていた。手を止めるほどではない。だが、忘れられない。

斧を握った。木を割ろうとした。刃が木に食い込む。いつもの感触だ。煙が目にしみる。

印が跳ねた。

動揺した。耳の印が熱く収縮した。ちんぽが、勝手に硬くなった。布の下で膨らむ。先から我慢汁がにじむ。乳首も、布の裏で固い。触られていない。印だけだ。

（なんでだよ）

視線を感じた。

小屋の外。山の気配だ。人の気配ではない。獣の、神の気配だ。湿った空気が、隙間から入ってくる。息が乱れた。

黒牙の気配だ。

朔は斧を置いた。立ち上がった。窓の外を見た。何も見えない。木々だけだ。だが、視線はある。自分の体を、正確に捉えている視線だ。

「……出てこい。いるなら」

声を出した。悪態が混じった。

返事はない。気配だけが濃くなる。耳の印が、さらに熱を増した。穴が、ひとりでに窄まる。昨夜の精液が、まだ奥に残っている。奥が、熱を覚えて疼く。

（触られてないのに。なんで反応する）

ちんぽが完全に勃起した。我慢汁が布を染める。太ももを伝う。糸を引く。穴が、勝手に締まる。何も入っていないのに、入口が開いて、すぐ閉じる。ぬるい音が、小さく立つ。

気配が近づいた。

扉の向こうだ。だが、入ってこない。視線だけが、朔の体をなぞる。耳の印。首筋。胸。股間。穴。全部を、見られている感覚がある。

「触るなよ。……来るな」

言った。声が掠れた。

気配が、わずかに動いた。扉が開かなかった。代わりに、熱い息が隙間から入ってきた。獣の匂いだ。甘い。血の匂いが混じる。種の残りと同じ匂いだ。

耳の印が、熱く疼いた。

「あっ……」

声が出た。短く。抑えた。

（なんで声が出る。触られてないのに）

黒牙の気配が、さらに濃くなった。視線が、耳に集中する。印の場所だ。熱が、耳の中まで落ちる。動揺が強まる。

ちんぽから我慢汁が、とろりと垂れた。床に落ちる。滴が続く。先が、布を押し上げて跳ねる。穴が、内壁を縮めて、昨夜の精液を押し出

そうとする。ぬるりと、太ももに伝う。入口が、空気を飲む。

「……くそ。黙ってろ」

悪態をついた。意地を残した。

気配が、一度弱まった。視線は残る。朔は息を整えた。斧の柄を握り直した。布の中のちんぽが、柄に当たる。恥ずかしい。

再び、気配が濃くなった。耳のすぐ後ろに来た。触れない。息だけがかかる。熱い。牙の気配がする。噛まれる予感だけがある。

「触るな。……印を、触るな」

言った。声が震えた。

視線が、耳の印を追った。熱が走る。疼きが、股間まで落ちる。ちんぽが跳ねた。我慢汁が飛ぶ。穴の縁が、開いたままひくつく。

戸惑った。体が先に動いている。選択が揺れている。

恥ずかしい。体が、神の気配だけで、昨夜の種を思い出している。穴が、形を覚えている。奥が、熱を欲しがっている。乳首が、布に擦れて痛い。

黒牙の気配が、首筋に落ちた。触れない。息だけだ。首筋の皮膚が、熱を帯びる。

「……やめろ。来るな」

「お前の体が、俺を呼んでいる」

低い声がした。小屋の床に落ちる。

「印が疼いているだろう。種が残っているだろう。穴が、ひくひくしているだろう」

「……知るか。出ていけ」

悪態を返した。

心配が、耳に近づいた。触れない。歯の先端が、印のすぐ上をかすめた。熱だけが残る。血は出ない。

「あっ……っ」

ちんぽが、限界まで硬くなった。我慢汁が止まらない。先が赤く、脈を打つ。穴が、収縮を繰り返す。何も入っていないのに、昨夜のちんぽの形を、内壁が覚えている。締めつける。入口から、ぬるい液が糸を引く。種と愛液が混ざる。

「触らない。今日は触れない。お前の体が、どこまで反応するか、見ていたい」

声が、耳のすぐ近くでした。息がかかる。熱い。

「……ずるい。視線だけで……やめろ」

「やめない。印は俺のだ。体が覚えているなら、今日はそれだけでいい。残すかどうかは、後だ。俺は、お前の反応を、もっと知りたい」

視線が、股間に落ちた。ちんぽを、正確に捉えている。我慢汁の垂れを、見ている。布が、先の形を隠せていない。

朔の腰が、わずかに揺れた。自分で動かしたのではない。体が、勝手に反応した。空の穴が、一度、強く締まる。

「……なんでだ。儀式は終わった。なんでまだ……」

「終わっていない。種は残っている。印は疼いている。お前は、まだ俺の前にいる。俺は、お前を離したくない」

気配が、少し離れた。視線は残る。

耳の印が、ゆっくりと疼きを弱めた。だが、消えない。熱が、残り続ける。

ちんぽは、まだ硬い。我慢汁が、布をびしょびしょにしている。穴が、収縮を止めない。精液が、少しずつ漏れ出る。入口が、開いたまま閉じない。

戸惑いが残った。体が先に動いた。意地はまだある。

黒牙の気配が、山の奥へ引いていく。視線が、薄くなる。

「印が鳴ったら、それが答えだ。種は、まだお前の奥にいる」

声が、遠ざかった。

朔は、斧を拾った。木を割ろうとした。刃が、木に食い込まない。手が震えている。

ちんぽが、まだ勃起したままだ。我慢汁が垂れる。穴が、収縮を止めない。布を張り、先が透ける。

耳の印が、弱く脈打っている。

体は、すでに揺れ始めている。斧の刃は、まだ木に届かない。

朔は、布を替えた。火を強くした。山道の気配を、背中で感じた。太ももを伝う種が、冷めない。

選択が、揺れている。

——第2話　了

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 因習の贅婿

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026・8・27

レーティング R18